

おわりに

♪なんでこんなに可愛いのかよ／孫という名の宝物♪

そんな歌がありました。少子化の時代、「孫という名の宝物」を前に、ああもしたい、こんなこともしてやりたいという思いで、この小冊子を手に取っていただけたのではないかと思います。自分たちが子育てをしたころとは違う「今どきの子育て」はいかがだったでしょうか。

時代が違うからいろいろ違いがあるだけではありません。祖父母と孫の関係は、親子の関係に比べて年齢差が大きくなります。そのため孫は幾つになっても「幼い者」に見えるようです。だからかわいくて、守ってやりたいと思ってしまうのです。

『ぼくは孫』(板橋雅弘・作、西村敏雄・絵、岩崎書店)という絵本には、孫が「なんで(祖父母は)パパやママとちがってとってもぼくにやさしいんだろう」と、疑問に思う場面があります。「なぜだかかわいくてしかたない。だからついあまやかしてしまうんだ」と祖父が答えています。「自分が親の時には、子どもにもっと厳しかった…オニみたいだったんだから」と。

時代も違う、関係性も違うということを心して、孫に接することが大切ではないでしょうか。

たっぷりかわいがられた孫は、きっとたっぷりかわいがることができる祖父母になるでしょう。そんな祖父母になりたいと思うでしょう。そうやってあなたの「孫育て」への思いは受け継がれていきます。

でも、「かわいがること」は、「何でもやってあげること」ではありません。心からの善意でやったことであっても、もしかしたらそれは、「孫の生きる力」を削いでいたり、親が「『親』になっていく力」を削いでしまっていたりするかもしれないのです。

当たり前のことですが、子育ての主役は『親』です。どんな場面でも、子育ての方針を決めるのは『親』であって、『祖父母』ではありません。『祖父母』の役割は、一生懸命子育てをしている『親』たちの、よりよいサポーターになることです。「大変だね」「がんばってるね」「よくやっているよ」という子育ての先輩からの声かけは、親にとって励みになるでしょう。また、「できることは手伝うから、言ってね」という申し出は、必死で子育てをしている親にとって何より心強いサポートになるでしょう。

「孫」を愛しいと思う気持ちは、孫が生きる未来の社会を考えるきっかけにもなると思います。自分の孫も含めて、いま生を受けた幼い子どもたちすべてが「暮らしやすい」社会にしていくために、祖父母世代に何ができるか考えていく…そんなチャンスも「孫」が与えてくれたものかもしれません。

